

インドネシアの高等教育機関における イスラーム学習の充実とその背景 ——一般系国立大学の取り組みに着目して——

中 田 有 紀

キーワード：インドネシア、大学、イスラーム学習、宗教教育

はじめに.

本稿の目的は、インドネシアの高等教育機関において、イスラーム学習（イスラームに関する学び）の機会が充実している背景について、一般系の国立大学における取り組みを通して考察することを目的とする。

インドネシアの学校教育は、就学前から初等・中等教育までは、教育文化省が一般系の学校（スコラ）を管轄し、宗教省がイスラーム系の学校（マドラサ）を管轄している。また、高等教育機関（総合大学、インスティテュート、スコラ・ティンギ、ポリテクニク、アカデミーから成る）においても、二つの省庁が管轄しており、2014年以降は、研究・技術・高等教育省が、その後、2019年10月以降は、以前と同様に教育文化省が一般系の高等教育機関を、宗教省がイスラーム系の高等教育機関を管轄している。

一般系の国立大学では、学内にモスクが創設されていることが多く、大多数を占めるムスリムの学生がイスラームについて学び、関連する学習活動に参加する機会は充実している。こうした傾向が顕著にみられる背景には、インドネシア特有の社会状況や学校教育における宗教の法的位置づけについて理解することが必要であると考える。

本稿では、1980年代後半以降の社会のイスラーム化に伴う人々のイスラーム学習への関心

の高まりとともに、国家がめざす人材育成における宗教的価値観との関わりから、一般系の高等教育機関において、イスラーム学習の機会が充実している背景を考察することで、インドネシアの高等教育機関におけるイスラームの実態を読み解きたいと考える。

以下では、まず第1節において、1980年代後半以降のインドネシアにおいて、イスラーム学習への関心が高まりを見せた経緯を整理し、続いて第2節では、高等教育を含む、インドネシアの学校教育に関する法規定における、宗教的価値や宗教教育の位置づけについて整理する。第3節では、近年の一般系の国立大学におけるイスラーム学習の取り組みについて、2019年2月および9月に収集した資料等をもとに明らかにする。その後、第4節で、一般系の国立大学においてイスラーム学習がさかんに行われる背景として、人々のイスラーム学習への関心と、国民教育における宗教の位置づけがどのように関わっているのかを考察したい。

1. イスラーム学習に対する人々の関心の高まり

インドネシアでは、国民の約90%がムスリムであるが、社会のあらゆる側面において、イスラームの活性化が顕在化したのは、1980年代から1990年代にかけてのことだった。この時期から、礼拝の務めを守り、ベールを着用し、モスクでの講話などに参加する人びとが各地で顕在

化し、またイスラーム関連の出版も増加するようになった（例えばHefner2000,見市2004, 2014, 野中2015など）。こうした展開には、1970年代以降の都市部でのダッワ運動に関わった大学生をはじめとする若者たちの働きかけが大きな影響力を与えたとされる（例えば野中2010など）。ユディ・ラティフは、彼らをインドネシアにおけるムスリムの「第五世代の知識人」と位置づけ、政治活動の規制を受けるなかで、社会活動や出版活動などに従事した者たちが多いことを指摘している（Yudi Latif 2008 : 337-338）。彼らのなかには、モスクなどの礼拝施設における子どものためのクルアーン学習の指導に貢献した学生たちもいた。さまざまな学部で学ぶ学生たちが、モスクでの子どもの学習活動に関わるようになった契機は、1970年代後半から80年代にかけてのインドネシアの政治・社会状況が大きく関係していた。当時は、政府批判につながるものが疑われるような集会は、厳しく規制されていた。しかし、政治的要素を持たない宗教教育に関する活動に対しては、政府は比較的寛容だったこともあり、学生たちは、子どものためのブンガジアン交流フォーラム（FOSIPA）を開催したことがあった。これは子どものためのクルアーン学習に関わる若者たちが集い、意見交換をする機会となった（中田2005他）。

クルアーン読誦学習などを行う、ブンガジアン・クルアーンと称するイスラーム基礎学習の営みは、学校教育が普及する以前から、個々の村々で行われるムスリムの学びの場だった。主として7歳以上の子どもたちが学ぶブンガジアン・クルアーンの学習内容や方法は、個々の教師に一任されており、統一的な評価基準や標準カリキュラムなどは存在しなかった。しかし、そうした旧来からのブンガジアン・クルアーンを大きく変えるきっかけとなったのが、『イクロ』というクルアーン学習テキストとそれを用いる組織的な学習の機会を提供する、クルアーン学習施設の全国的な普及だった。『イクロ』

を第一巻から順番に学び、最終巻第6巻を修了する頃には、クルアーンを読めるレベルに達する構成になっている。『イクロ』を用いるクルアーン学習施設を通して、クルアーン読誦は、就学前の子どもから学習を開始し、標準的なカリキュラムに従うことで、幼稚園児や小学生のうちにクルアーン読誦ができるということが、多くの人々に共有された。成人ムスリムで、クルアーン読誦が十分にできない者に対しても、『イクロ』を用いた学習の機会が提供されることもあった（例えばAs'ad Humam2001 : 5-6など）。したがって、『イクロ』を用いるクルアーン学習施設の普及は、子どもだけでなく、大人にとってもクルアーン読誦学習が身近なものであり、大切な学習であることを認識させるきっかけになったといえる⁽¹⁾。

『イクロ』を活用するクルアーン学習施設の全国的な普及に関わったのが、インドネシア・モスク青年交流会（BKPRMI : Badan Komunikasi Pemuda Remaja Masjid Indonesia）だった。BKPRMIは、特定のモスクの活動家に限定するのではなく、さまざまなモスクでの活動家たちと交流することをめざして、1977年、バンドンで結成された組織だった（Yudi Latif 2008 : 373, Moh.Haitami Salim 2002 : 28-29, 中田2020 : 57など）。反政府的な活動への関与などを疑われたため、組織的な活動が事実上できなくなった時期があった。しかし、当時、反共政策のもとで、宗教教育活動は奨励されていたため、BKPRMIは、『イクロ』を活用するクルアーン学習施設の全国的な普及に関わることを通して、組織としての活動を復活させた。FOSIPAへの参加経験がある者や、BKPRMIによるクルアーン学習施設普及の活動に直接・間接的に関わった者たちは、現在では、大学に限らず省庁や地域社会で活躍する40代から60代となっている⁽²⁾。

他方、『イクロ』を活用するクルアーン学習施設は、1990年以降全国各地に急速に普及し、2000年以降は、さまざまな教育組織が、『イクロ』

や他の効果的なクルアーン読誦学習テキストを用いるクルアーン幼稚園やクルアーン児童教室などを開設した。こうした展開を政府も容認し、クルアーン学習施設を、ノンフォーマルな教育施設として位置づけ、学校教育などのフォーマル教育を支えることを期待するようになった⁽³⁾ (中田2020: 99, Departmen Pendidikan Nasional 2001, Direktorat Pendidikan Diniyah dan Pondok Pesantren Direktorat Jenderal Pendidikan Islam Departmen Agama RI 2008 など)。

つまり、イスラーム系の学校に通わず、一般系の教育機関で学ぶ生徒であっても、地域のモスク等でクルアーンを読誦や暗誦学習の機会を得られる環境が創られた。したがって、1990年代後半以降に生まれた10代後半から20代、すなわち、現在、一般系の高等教育機関で学ぶムスリムの学生たちは、『イクロ』などの効果的な学習テキストを用いたクルアーン読誦学習に、幼少期から参加できる環境が整った社会で育った若者たちであるといえる。

2. 独立後のインドネシアにおける学校での宗教教育

1) 学校教育に関する法規定における「宗教」

インドネシアの国民教育制度法においては、宗教の信仰や敬虔さを身につけることを重視している。それは、建国五原則パンチャシラの第一の原則である「偉大なる神への信仰」に基づいたものである。

2003年国民教育制度法(2003年法律第20号)の第1条第1項では、「教育とは、学習者が、宗教的信仰心、自制心、個性、知性、純粋な倫理観を身につけ、個人、社会、国民および国家が必要とする技能を習得し、自身の可能性を開花させるよう、学習環境や学習のプロセスを実現するための意図的で計画的な取り組みである」とし、第1条第2項では、「国家教育とは、パンチャシラおよび1945年インドネシア共和国憲法に基づいて行われるものであり、それは、

宗教のさまざまな価値や、インドネシア国家の文化に根ざし、時代の変化にともなうニーズに対応するものとする」と位置付けている。また、同法第3条では、国家教育の目的を定義している。すなわち、「国家教育は、能力を発展させ、国民の生活を知性化するため、貴い国家の特性と個性を形成し、偉大なる神を信仰し、敬虔であり、純粋な倫理を身につけ、健康であり、学があり、有能で、創造的であり、自立した人間であり、また民主的で責任のある国民となるように、学習者の潜在力を発展させることを目的とする」としている。

このように、国民ひとりひとりが宗教を信仰し、敬虔であることは、インドネシアの国家教育においては、重要な要素の一つとされてきた。

2) 学校教育における宗教教育の義務化とその位置づけ

上述したように、学校教育において、宗教の信仰を重視する姿勢は、オランダからの独立後、1950年以降、国民教育に関する規定において、明確に示されてきたことである。それ以降、学校教育のカリキュラムにおいて、宗教教育が含まれることになったが、当初は、義務的性格は弱く、政治状況の影響を色濃く受けていた。

1950年に定められた「学校教育基本法」においては、学校での宗教学習が行われることが規定されたが、それは、同法の「解説(penjelasan)」で、義務的性格を弱める文言があったと西野(2003: 302)は指摘している。その後1951年7月の「国立学校における宗教教育規程」において、小学校4年生から中学および高校を通して宗教が週2時間教えられることなどが規定された。しかし、同じ宗教を信仰する生徒が一つの学級で10人に満たない場合の宗教教育の提供については規定されていなかった(西野2003: 302-303, Assegaf, Abd.Rahman 2005: 119-120)。

その後、1960年代になると、宗教教育の実質的な義務化は、高等教育段階から開始された。

初代大統領のスカルノは、1950年代後半以降、民族主義（ナショナリズム）、宗教（アガマ）、共産主義（コミュニズム）の諸勢力の均衡をめざすナサコム体制のもとで、独裁的な権力を掌握した。この時期、共産主義勢力の拡大を懸念した軍が、高等教育段階からの宗教教育の義務化に大きく関わっていたとされる（西野1990：80-82、西野2003：303-304、Kelabora242-244）。

その後、陸軍出身のスハルトが大統領に就任すると、スハルトは反共産主義の立場から、中等教育以下の宗教教育を積極的に進めた。1960年代後半から70年代にかけて、宗教教育は、学校教育における基本教科のなかで、重要な科目と位置づけられた。まず、1968年のカリキュラムにおいて、宗教教育は、教科順の第一位に置かれた。その後、1975年カリキュラムでも、第一位の科目とされ、新たに教科として導入されたパンチャシラ道徳教育が第2位の科目とされた。1989年国民教育制度法の制定を経て、改訂された1994年カリキュラムでは、「パンチャシラ道徳教育」が「パンチャシラ・公民教育」という教科に再編され、この科目が教科順の1位に位置付けられ、宗教教育は第2位となった（西野2003：304,307など）。しかし、その後の2004年スコラ・マドラサのカリキュラムでは、宗教教育は科目順の一位に位置付けられ、2位が「公民教育」とされた（服部2007：24-27）。2013年スコラ・マドラサカリキュラムにおいては、必修科目の第一位科目に、「宗教教育および道徳」が位置付けられ、第2位の科目として、「パンチャシラおよび公民教育」が位置付けられている⁽⁴⁾。

スハルト政権後の1999年以降は、宗教教育の実施が、マイノリティの生徒にも行われることが強化されるようになった（西野2003：310-311）。2003年国家教育制度法では、第12条第1項aでは、「教育単位における各学習者は、自らの信仰する宗教に即して、同じ宗教の教育者によって教えられる宗教教育を受ける権利をもつ」とされた。同法におけるこの規定は、2007

年政令55号（宗教教育および宗教専門教育に関する2007年政令第55号）において、より詳細に規定されている。同政令の第3条第1項において、「すべての系統、段階、種別における各教育単位は、宗教教育を提供する義務をもつ」とし、第4条第1項では、「フォーマルな教育および同じ段階の教育プログラムにおける宗教教育は、少なくとも宗教教科あるいは宗教講義科目の形態で提供される」とした。第2項では、「すべての系統、段階、種別の教育の教育単位における各学習者は、自らが信仰する宗教に即して、そして同じ宗教の教育者によって教えられる宗教教育を受ける権利を持つ」とされた（中田2009：187、西野2010：39-40）。

このように、インドネシアでは、独立後、学校教育カリキュラムにおいて、宗教教育が位置付けられ、段階を経て義務化され、重要科目と位置付けられてきた。現在では、すべての教育単位において、宗教教育は、学習者が享受すべき教育として位置づけられている。

3) 高等教育機関における宗教的価値の重要性

高等教育法（2012年法律第12号）においても、高等教育の目的において、神への信仰と倫理観を重視していることが明記されている。同法の第5条aでは、高等教育は、「偉大なる神を信仰し、敬虔であり、純粋な倫理を身につけ、健康で、学があり、知的であり、創造的であり、自律しており、熟練であり、有能であり、国にとって有益な人間となるように、学生の潜在力を発展させることを目的とする」と規定している。

これに即して、インドネシアの高等教育修了者に求められるコンピテンシー⁽⁵⁾は、態度、技能、特別技能に分けて構成されており、態度については、10項目掲げられている。第一に、偉大なる神を信仰し、宗教的態度を示すこと、第二に、宗教や道徳、倫理にもとづいて職務を遂行するうえで、高度な人間の価値を尊重すること、第三に、社会、民族、および国家の生活の質およびパンチャシラに基づく個性の向上に貢

献すること、第四に、祖国を誇りに思い、愛する国民としての役割を果たし、ナショナリズムの精神とともに、国家および国民に対する責任を持つこと、第五に、文化や思考、宗教や信仰の多様性や他者の独自の見解を尊重すること、第六に、協力し、社会的感性を持つとともに、社会や環境に配慮すること、第七に、社会および国家における生活において、法に従い、礼儀正しくあること、第八に、学問的価値、規範、倫理を内面化すること、第九に、専門分野における職務において、自律した、責任ある態度を示すこと、第十に、自律、奮闘、および企業家精神を内面化すること、としている。

このように、高等教育修了者に求められる態度には、宗教の信仰や倫理観を重視した態度が1番目と2番目に掲げられている。その後3番目と4番目に、国是であるパンチャシラに基づく国家精神が掲げられ、それ以降に、社会性や学問の習得に関する内容が明記されている。すなわち、信仰心を持ち、宗教的な価値・規範を身につけ、倫理観をもつことは、高度な知識や技能を身につけることが期待される高等教育修了者にとって欠かせない資質であることを明確にしている。

学問を志し、高度な知識や技能を習得することが高等教育修了者には求められることである。インドネシアでは、そうした知識や技能だけでなく、信仰心を持ち、倫理や道徳を尊重する姿勢にも重きが置かれている。このような制度のもとで、高等教育機関において、宗教教育は取り込まれている。

3. 一般系国立大学におけるイスラーム学習の充実

近年の一般系の国立大学におけるムスリムの学生たちは、どのようにイスラームを学ぶ環境を享受しているのだろうか。以下では、複数の一般系国立大学において、課外活動としてクルアーンの読誦や暗誦学習が奨励されている状況とともに、「イスラーム宗教教育」の取り組み

方を明らかにしていく。

1) 一般系の大学におけるクルアーンに関する学習

①クルアーン読誦・暗誦の奨励

大学内のモスクを拠点とし、クルアーンの朗誦や暗誦学習など、クルアーンに親しむ機会は、一般系の高等教育機関において、学生たちに開かれている。こうした活動が各大学で行われている背景には、インドネシア全国に限らず、東南アジア、世界レベルで行われるクルアーンの朗誦や暗誦の技能を競うコンテストが開催されていることが関わっている。近年では、インドネシアの高等教育機関の学生を主たる対象とする学生クルアーン朗誦コンテスト (Musabaqah Tilawtil Qur'an Mahasiswa) がある。2019年で16回目を数えた⁶⁾このコンテストは、研究・技術・高等教育省も関与しており、主として一般系の高等教育機関の学生を対象としている。学生向けにこのようなコンテストが開催されるのは、国民教育の目的として、宗教の信仰心を持ち、敬虔であることや道徳心の育成が重視されていることが関係している。同コンテストが目指す目標とは、クルアーンに関する学生の才能を開花させること、学生生活において、クルアーンの内容のさまざまな価値を実践させること、学生たちにイスラームの文化芸術の価値を浸透させること、などが掲げられている。コンテストで競われるのは、クルアーンの朗誦や暗誦、クルアーンの内容についてアラビア語や英語で行うディベートなどである。このコンテストにおいて、イスラーム系の高等教育機関の学生が参加することができるのは、クルアーンの内容に関する論文のコンテストやクルアーンに関するコンピューターアプリケーションのデザインのコンテストに限られており、クルアーンの朗誦や暗誦などは参加できないことになっている。

2019年は、アチェ州のシーア・クアラ大学で実施され、全国から400以上の大学の学生たち

が参加したという⁽⁷⁾。こうしたコンテストの開催は、それぞれの一般系の大学の関係者のモチベーションを高め、コンテストに向けたトレーニングとして、各大学の学生組織などにおいて、クルアーンの朗誦や暗誦学習が行われている。しかしコンテストへの出場の有無にかかわらず、学内外でのクルアーンの朗誦や暗誦への関心は高まっている。

例えば、スブラスマレット大学では、学内のクルアーン暗誦者が主体となって、同大学のモスクで、クルアーン暗誦指導を実施している。こうした取り組みには、近隣の高校生の参加希望もあるが、学生たちはそれぞれの学部での勉強が主体であるため、学外向けのクルアーン暗誦指導は行っていなかった。またディポネゴロ大学では、クルアーン暗誦者を大学が雇用し、大学モスクでの学生向け指導を実施していた(中田2019:129-130)。

近年の一般系の大学には、クルアーン暗誦者がいる例は少なくない。その場合、クルアーン暗誦者の推薦枠で大学入学を果たした学生も若干名いる。近年の傾向として、国立大学は、推薦入試の幅を拡げ、クルアーン暗誦者を、他の特別な技能をもつ学生と同等と捉え、推薦枠を設けているケースが増えている(中田2019:130-131)。クルアーン暗誦者は、専門の学問分野における成績優秀者が多いという見解は、多くの大学関係者に共通している。医学部や歯学部など、高度な知識や技能を必要とする学部の成績優秀者が、クルアーン暗誦者であることも多いという⁽⁸⁾。したがってクルアーン暗誦者は、一般の知識や技能にも優れた者が多いため、一般系の大学において一目置かれている。

②イスラーム基礎知識の習得のサポート

イスラームを信仰し、礼拝などを行ううえで欠かせないのは、クルアーンを読誦することや、正しい礼拝の仕方を身につけることである。一般系の高等教育機関への入学の際、そうした宗教に関する基本的スキルを身につけることは入学の条件には含まれていない。しかし、大学入

学後、そうした基本的なスキルが十分に身につけていない学生を対象に、イスラームの基礎を学ぶ機会を設けている大学は多い。これは、上級生から下級生に指導する形態で行われるのが一般的である。学生によるチュートリアル制度を先駆的に取り入れたのは、インドネシア教育大学だった。同大学では、学生チュートリアル・プログラムは、モスク組織の活動のうち、宗教教育担当教師の監督と指導のもとで、全学部の1年生のムスリムに参加が義務付けられた活動である。上級生による、新入生向けのイスラーム基礎学習プログラムとして行われ、全学部の新一年生は、セメスター期間中の約半年間、毎週土日の午前9時~12時まで、モスクでのプログラムに参加することが必要とされ、教員による講話および上級生の指導の下でのグループワークが行われる(Syahidhin 2001:15-16,中田2019:128-129)。他方、スブラスマレット大学では、全学部の新入生向けのオリエンテーションの一環として、グランド・オープニング(Grand Opening)プログラムを企画し、ムスリム学生には、イスラームの基礎学習の機会が提供される。クルアーンの読誦や礼拝実践などが主な内容である。これらの指導を担当したのは、選抜された学生たちだった(中田2019:128)。ガジャマダ大学では、クルアーンを読誦および礼拝実践に関するスキル指導を、各学部で行うという。

近年の傾向として、クルアーンを正しく読めない一般系の大学のムスリム学生は少なくなっているという見方もある。しかし、多くの国立大学では、ムスリム学生の基本的なスキルとして、礼拝の仕方やクルアーンを読誦が不十分な学生に対してサポートするシステムを整えている。

2) イスラームの教義をさまざまな視点から学ぶ機会の提供

シャヒディン(Shahidin2019:1-7)によれば、イスラームに関する教育は、クルアーンとハ

ディースの内容に基づく「イスラーム教育」と、一般的な教育でありながらも、部分的にクランやハディースの教えを取り入れる「イスラーム的な教育」、さらに「イスラーム宗教教育」に分けられるという (Syahidin2019:1-7)。「イスラーム宗教教育」とは、生徒や学生たちに、生活のさまざまな側面でイスラームの教えの基本を教えるものであり、教育段階に応じて、信仰心に篤く、宗教の教えに従う人間となるように指導することが重視される。したがってイスラームの宗教の専門家の養成が目的ではない。児童・生徒や学生が、信仰心を持ち、宗教の教えに従って生きるよう導くことが求められる学校教育の「イスラーム宗教教育」については、これまでの研究からいくつかの課題があることをシャヒディンは指摘している (Shahidin2019:11-13)。そこには、イスラーム宗教教育を、ひとつの教科としてのみ行うか、あるいは教科以外の活動に広げて行うべきなのかということや、イスラームは本来、宗教知識と一般の知識を分けず、統合して捉えることをめぐる課題なども大きく関係しているという。

さまざまな課題を抱えながらも、高等教育機関におけるムスリム学生のための宗教教育、すなわち「イスラーム宗教教育」は、ひとつの教科として、講義形式の授業で行うような枠を超えた取り組みも見られる。

研究・技術・高等教育省は、各高等教育機関向けの教科書を作成し、国立および私立大学向けに紹介している⁽⁹⁾。また、宗教省も、一般系の高等教育機関におけるイスラーム宗教教育のテキスト作成に関する手引きを発表している⁽¹⁰⁾。

一般系の高等教育機関において、イスラーム宗教教育を通して学ぶテキスト内容を統制し、特定の思想や急進的な考えを助長することを防ぐことは重要であろう。政府発行のテキストやテキスト作成の指針が提示されるなかで、国立大学で、独自にイスラーム宗教教育の教科書を作成し、使用している例もあれば、特にテキス

トを指定せず、さまざまな文献を参考文献とし、学生たちによる議論を中心に行う方法が採られる場合もある。

表1は、ジョグジャカルタ国立大学とスマラン国立大学のイスラーム宗教教育のテキストの目次の内容を示したものである。

二つの大学がそれぞれ作成したテキストの内容からは、イスラームという宗教の基本的な考え方とともに、一般的な社会の仕組みや一般の知識と、イスラームの教えに基づくさまざまな規範との関わりをテーマとする項目が主である。例えば、イスラームの教えと、市民社会や経済システム、グローバリゼーションなどの一般社会や政治状況との関わりについて学ぶためのテーマが含まれている。一般系の教育機関における宗教教育では、宗教の専門知識や特定の思想を学ぶのではなく、信仰をもち、宗教に従って生きることで人格形成を促すことが求められる。イスラーム宗教教育のテキストでは、イスラームの教えを、一般的な知識や技術、社会状況との関わりから考えることを試みる機会が設けられている。

イスラーム宗教教育の時間には、こうした指定テキストだけでなく、さまざまな文献を用いて、学生たちが議論する機会が設けられている。ガジャマダ大学では、指定テキストを設けず、学習テーマごとに参考文献を設定し、議論する機会を設けるという。例えば、「イスラームと民主主義」をテーマとした授業では、テーマごとに参考文献を活用し、各学生に関連文献を読ませたり、関連する情報をダウンロードさせたりするという。また、民主主義や人権に関する文献も参照させて、レポートを課すという。また、パジャジャラン大学におけるイスラーム宗教教育は、パンチャシラ教育や公民教育などの他の必修科目と合同で学ぶ機会も提供され、日常のさまざまな課題とイスラームについて、議論する機会が与えられたという⁽¹³⁾。

テキストを使用した講義形式やディスカッション形式の授業に加え、セミナーの開催もな

表1 ジョグジャカルタ国立大学とスマラン国立大学のイスラーム宗教教育の教科書目次

<p>ジョグジャカルタ国立大学の『イスラーム宗教教育』のテキスト⁽¹¹⁾の目次</p> <ol style="list-style-type: none">1. 人類と宗教2. 宇宙への神の慈悲を伝えるイスラームという宗教3. イスラーム法の源：方法論と適用の間で4. 信仰の概念と指導5. イスラームにおける宗教実践の概念6. イスラームにおける倫理と人格教育の概念7. イスラーム教育の概念8. 科学技術とイスラーム文明の概念9. イスラームにおけるジェンダー平等の概念10. イスラームにおける結婚11. イスラーム政治と市民社会12. イスラーム経済のシステム13. イスラームと人権14. イスラームとグローバリゼーション
<p>スマラン国立大学の『イスラーム宗教教育』のテキスト⁽¹²⁾の目次</p> <ol style="list-style-type: none">1. イスラーム教2. イスラームにおける人間の本质3. アキダ（信仰）について4. シャリーア（法）、イバダー（宗教実践）とムアマラート（社会関係法）5. イスラームと知識6. イスラームにおける倫理7. 穏健なイスラームの見解8. イスラームにおける交際

される。例えば、ガジャマダ大学では、外部講師を迎え、午前8:00~12:00、午後1:00~5:00までのイスラーム宗教教育に関する講演を開催し、ムスリム学生にとっての必修科目である「イスラーム宗教教育」の受講者全員に参加義務を課したという。国内で起きた爆破テロ事件での被害者（ムスリム）を招待し、講演してもらったことがあるという。テロの恐ろしさを伝えるとともに、イスラームでは残酷な行為は禁じられていることを学生たちに理解させることを目的として開催されたものだった⁽¹⁴⁾。このように、講義として行う宗教教育だけでなく、外部者による講演の企画なども各大学で行われている。

「イスラーム宗教教育」では、イスラームの教えを、一般の知識や社会におけるさまざまな

課題との関わりから理解し、考察する機会を提供する傾向にある。

4. 考察 一般系の高等教育機関におけるイスラーム学習の機会の充実とその背景

本稿を通して、インドネシアの一般系の国立大学では、大学内において、1) イスラームの基礎であるクルアーン学習の機会を設けるとともに、2) イスラームの教えをさまざまな知識や技術、社会問題との関係から考える機会を提供していることを明らかにした。

一般系の高等教育機関において、このように、イスラームについて学ぶ機会が提供されている背景には、①社会のイスラーム活性化に伴い、クルアーン学習への関心が社会全体で高まったこととともに、②宗教の信仰および徳や倫理

を身につけることを尊重してきた、インドネシアの国民教育の在り方が大きく関わっていると見える。

1) クルアーン学習への関心の高まり

インドネシアの一般系の高等教育機関では、イスラームの教えの源であるクルアーンの朗誦や暗誦などに親しむことを奨励するとともに、基礎的なクルアーンを読誦が十分にできない学生には、それを学習する機会が提供されている。こうした取り組みが実施されるのは、一般系の教育機関で学ぶムスリムにとって、クルアーンを読誦や礼拝の実践は、重要であるという考え方が共有されてきたことが関係している。

クルアーン読誦学習は、インドネシアにおいては、主として7歳以上の子どもたちが、個々の村々で学んできた。その学習内容や方法は、個々の教師に一任されており、標準的なカリキュラムや評価方法などは存在しなかった。しかし、クルアーン読誦を効果的に行うために創案された『イクロ』というテキストを用いるクルアーン幼稚園などのクルアーン学習施設が普及すると、クルアーン読誦学習は、就学前の子どもから学ぶことであり、また、大人にとっても大切であるという認識が、多くのインドネシアのムスリムに共有されるようになった。

『イクロ』を用いて組織的に営まれるクルアーン学習施設が普及し、人々のクルアーン学習に対する関心が高まったことにより、クルアーンを読誦や礼拝の仕方などのイスラームの基礎的なスキルは、一般系の大学で学ぶムスリム学生であっても、おろそかにすべきではない重要事項として捉えられている。また、一般系の高等教育機関の学生のなかに、クルアーンを流暢に朗誦する者や、クルアーンの暗誦者がいることは不思議ではなくなりつつある。

2) 宗教の信仰を重視する国民教育との関係から

インドネシアにおいては、独立後の国民教育の形成において、宗教を信仰し、その教えに従っ

て生きる敬虔さを身につけることは重要な要素とされてきた。それは、小学校や中学校、高校での教育に限定されず、高等教育レベルにおいても例外ではない。人文、社会、医学、農学、工学などの一般の学問を探求し、専門的な知識や技能を学ぶ一般系の高等教育機関の学生であっても、敬虔な宗教の信仰者として行動することは、重視されている。

こうした法制度のもとで、一般系の高等教育機関では、講義以外の時間に、ムスリムの学生がイスラームの基本の学習を徹底させているといえる。しかしそれは、学生たちに、偏狭な宗教理解を促すものではない。ムスリム学生にとっての必修科目である「イスラーム宗教教育」は、一般の知識や現代社会が抱える課題とイスラームの教えとの関わりを学び、考える機会を提供している。宗教の教えに敬虔であるとともに、さまざまな知識や技能を身につけ、それを実社会で生かすことが、高等教育を通して期待されている。

おわりに。

本稿では、一般系の高等教育機関において、ムスリム学生がイスラームを学ぶ機会は、課外活動として行う学習と正規の必修科目として行う「イスラーム宗教教育」において提供されていることを概観し、その背景について考察してきた。一般系の大学におけるイスラームに関する学習の機会は、ムスリム学生がイスラームを正しく理解し、異なる考えや信仰を持つ人々への寛容さを育むことにつながっているのか、また、宗教と一般のそれぞれの知識を統合するような学びの機会となっていくのか、個別の事例を丁寧に見ていく必要があるだろう。また、イスラーム以外の宗教を信仰する学生の学内外での宗教学習の実態との関わりも考慮することで、インドネシアにおいて、マジョリティであるムスリムのためのイスラーム教育・学習の取り組み方の意義や課題を検討する必要もあるだろう。今後の課題としたい。

付記：本稿は、科学研究費助成事業（課題番号18K02424）の研究成果の一部である。

<注>

- (1) 例えばGade (2004) は、成人によるクルアーン朗誦への関わりについて論じている。
- (2) インドネシア教育大学やディポネゴロ大学などの一般系の国立大学のモスクの活動や運営に関わる大学教員の中には、FOSIPAなどへの参加経験を持つ者は少なくない。筆者は、2019年およびそれ以前のフィールドワークにおいてもこれらの参加経験者に会った。
- (3) 2003年国民教育制度法では、ノンフォーマルおよびインフォーマルな教育は、フォーマル教育を支えるものと位置付けられた（第6条第1項）。
- (4) 例えば小学校のカリキュラムは、以下を参照 Lampiran Peraturan Menteri Pendidikan dan Kebudayaan no.67,2013 tentang Karangka Dasar dan Struktur Kurikulum Sekolah Dasar/Madrasah Ibtidaiyah) <<http://bsnp-indonesia.org/2013/06/20/permendikbud-tentang-kurikulum-tahun-2013/>> 【最終閲覧日：2019年9月18日】
- (5) Peraturan Menteri Riset, Teknologi, dan Pendidikan Tinggi Nomor 44 Tahun 2015 tentang Standar Nasional Pendidikan Tinggi. (<https://kopertis3.or.id/v2/2016/01/15/permenristedikti-nomor-44-tahun-2015-tentang-standar-nasional-pendidikan-tinggi/>（アクセス日：2020年7月20日）
- (6) <https://mtqmn16.unsyiah.ac.id/>（最終閲覧日2020年8月17日）
- (7) 2019年9月30日に、ガジャマダ大学の学内モスク活動およびイスラーム宗教教育も担当する教員に筆者が行ったインタビューより。
- (8) 2019年2月および9月に複数の大学訪問の際に、大学モスクでの活動に関わる教員らとのインタビューで筆者が確認した。
- (9) 必修科目の教科書に関する回覧文書（Surat

Edaran Nomor : 435/B/SE/2016 Bahan ajar mata kuliah wajib umum) に基づく研究・技術・高等教育省による必修科目のテキストは、私立高等教育機関調整部のホームページで閲覧可能。
<https://www.kopertis6.or.id/kemahasiswaan/3355-bahan-ajar-mata-kuliah-wajib-umum.html>（最終閲覧日2020年8月15日）

- (10) <http://www.pendis.kemenag.go.id/pai/berita-51-panduan-penulisan-buku-teks-pai-pada-perguruan-tinggi-umum.html>にて、内容を確認することができる（最終閲覧日2020年8月15日）。
- (11) Ajat Sudrajat et al.2016を参照し作成。
- (12) Zaim Elmubarak et al. 2018を参照し作成。
- (13) 日本留学中のインドネシア人学生へのインタビューより（2020年2月17日）。
- (14) 2019年9月30日に、ガジャマダ大学の学内モスク活動およびイスラーム宗教教育も担当する教員に筆者が行ったインタビューより。

<引用・参考文献>

日本語文献

- 中田有紀「インドネシアにおけるイスラーム学習活動の活性化—大学生の関与とそのインパクト—」『アジア経済』第46巻第1号、アジア経済研究所、2005年1月、35-52頁。
- 「インドネシアにおけるイスラーム教育およびイスラーム宗教専門教育の法的位置づけ—2007年政令第55号の翻訳およびその解説を通して—」『学術フロンティア報告書 2008年度』東洋大学アジア地域研究センター、2009年、185(98)-200(83)。
- 「インドネシアの高等教育機関におけるモスクの役割と可能性——一般系国立大学の事例から—」『地域文化研究』No.20、2019年119-137頁。
- 「インドネシアにおけるブンガジアン・クルアーン（イスラーム基礎学習）の組織化—クルアーン読誦学習テキスト『イクロ』の創案と普及に着目して—」名古屋大学大学院教育発

- 達科学研究科博士学位論文（2020年7月31日学位授与、未刊行）
- 西野節男「インドネシアの公教育と宗教」江原武一編『世界の公教育と宗教』東信堂、2003年、295-315頁。
- 「東南アジア・マレー世界におけるイスラーム教育の変容——国家教育制度強化の中のローカルな実態から——」東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター編『アジア社会の発展と文化変容』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、2010年、21-55頁。
- 野中葉「インドネシアの大学生によるタルビヤの展開——大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習——」『東南アジア研究』第48巻1号、2010年、25-45頁。
- 『インドネシアのムスリムファッション——なぜイスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版、2015年。
- 服部美奈「曖昧化する境界——マドラサの制度化とプサントレンの多様化——」西野節男・服部美奈編『変貌するインドネシア・イスラーム教育』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター、2007年、3-34頁。
- 見市建『インドネシア——イスラーム主義のゆくえ』平凡社、2004年。
- 『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』NTT出版、2014年。
- 英語・インドネシア語文献**
- Assegaf, Abd.Rachman Politik Pendidikan Nasional, Pergeseran Kebijakan Pendidikan Agama Islam dari Praproklamasi ke Reformasi, Kurnia Kalam, Mei 2005.
- Ajat Sudrajat et al., Dinul Islam, Pendidikan Agama Islam di Perguruan Tinggi Umum, UNY Press, 2016.
- As'ad Humam et al., Balai Litbang LPTQ Nasional, Team Tadarus “AMM” Yogyakarta, Pedoman pengelolaan, Pembinaan & Pengembangan Membaca Menulis Memahami Al-Qur'an, 2001.
- Departmen Pendidikan Nasional, Pedoman Penyelenggaraan TK Alternatif model TK Al-Qur'an, 2001.
- Direktorat Pendidikan Diniyah dan Pondok Pesantren Direktorat Jenderal Pendidikan Islam Departmen Agama RI, Pedoman Penyelenggaraan TKQ/TPQ, 2008.
- FOSIPA Sektor I (Kodya Bandung, Kab., Bandung Kotif Cimahi, Kab. Subang, Kab. Sumedang) Bandung, Selayan Pandang Forum Silaturrahmi Pengasuh Pengajian Anak-anak (FOSIPA), Bandung, 1993.
- Gade, Anna.M, Perfection makes Practice, Learning, Emotion, and the Recited Qur'an in Indonesia. University of Hawai'i Press, 2004.
- Kelabora Lambert, Religious Instruction Policy in Indonesia. Asian Survey, Vol.16, No.3, 1976, pp.230-248.
- Moh, Haitami Salim, Gagasan dan Gerakan Pendidikan BKPRMI, Sebua Fenomena Baru Organisasi Kemasyarakatan Pemuda Islam pada Masa Orde Baru, STAIN Pontianak Press, 2002.
- Syahidin, Pendidikan Agama Islam di Universitas Pendidikan Indonesia, Syahidin et al., Pelaksanaan Pendidikan Agama Islam di Perguruan Tinggi Umum, Direktur Perguruan Tinggi Agama Islam Departmen Agama RI, 2002, pp.1-80.
- Aplikasi Metode Pendidikan Qurani dalam Pembelajaran Agama Islam di Sekolah, UPI Press, Januari 2019.
- Yudi Latif, Indonesian Muslim Intelligentsia and Power, ISEAS Publishing, 2008.
- Zaim Elmubarak et al., Islam Jalan Lulus, UNNES Press, 2018.

(客員研究員／立教大学兼任講師)

Islamic Learnings in Higher Education Institutions and Their Socio-cultural Context in Indonesia: A Focus on Secular National Universities

NAKATA Yuki

Secular higher education institutions in Indonesia accord Muslim students multiple opportunities to learn about Islam. The understanding of this recent tendency requires an examination of the socio-cultural context of Indonesia, including its legal system. This study therefore aims to probe the Islamic learnings that national universities in Indonesia impart for their Muslim students and their socio-cultural context.

The investigation reveals that secular national universities in Indonesia offer their Muslim students the opportunity to learn: 1) how to read and recite the Qur'an as an extra-curricular module and 2) to discuss the associations between general knowledge, social issues, and religion through Islamic education incorporated into the university curricula.

Two points are specifically identified as socio-cultural context of the above mentioned findings:

First, non-formal Quran schools and kindergarten using pedagogic material such as the Iqro textbook to teach students how to recite the Qur'an have been widely accepted in Indonesia since the 1990s. Indonesian Muslims have thus become aware that fundamental Islamic learning such as the reading and reciting of the Qur'an are essential for Muslim adults and Muslim children attending secular schools.

Second, the Higher Education Law and the National Education Law both stipulate that the acquisition of religious beliefs, appropriate morals, and desired ethical standards forms the predominant aspect of education in Indonesia. Therefore, in addition to the offering of extra-curricular Qur'an learning, universities have incorporated religious education into their compulsory curricula. However, such religious education do not impart a narrow understanding of religion to Muslim students; instead, they present a broad perspective through which learners can contemplate Islamic teachings.

Through such religious learning opportunities, Muslim students are expected to learn the skills of the real world by respecting the morals and ethics of Islam and learning knowledge from various disciplines.

Key words: Indonesia, University, Islamic Learning, Religious Education